

月刊 サンエスウォッチング

Vol.52

境界の消滅 Veno **BORDERLESS** Carbon HANDLEBAR II

開発段階でのお披露目は^{はばか}憚られるものですが、「Veno BORDERLESS Carbon HANDLEBAR II (ヴェノ ボーダレスカーボンハンドルバー 2)」については既に2度(2019年のカタログ Vol.11 と月刊 Vol.45) 公表しましたので、開発の最終段階ではありますが全貌にほぼ近い状態にてご紹介いたします。

▶ 20 年近く前からドロップハンドルを開発してきましたが、最近ではハンドルの概念を越えたような「リリーフバー」(Vol.36 掲載) も発表しました。「ボーダレスカーボンハンドルバー」(Vol.11 掲載) は、ドロップハンドルに対する使い方の境界線を越えて行くようなロジックで生み出したものでした。その2作目が本題のハンドルになります。



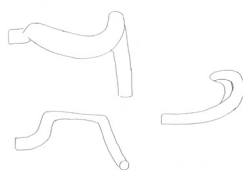
▶ 1作目(写真上)は“ドロップポジションが圧倒的に楽であること”が開発コンセプトでした。2作目(写真下)は加えてトップポジションでの快適性も追求するとともに、“リーチとドロップの0=ゼロ化”を目指しました。つまりステムクランプを軸としてトップもブラケットもドロップもとても楽、勿論カーボン素材の優位性もあり、手に伝わる感触に角が無く、アップライトで軽やかな操縦も実現してくれますから、何にしても楽なボーダレスです。



まずワイヤーでイメージを作ります



インダストリアルクレイで肉付きを整えていきます



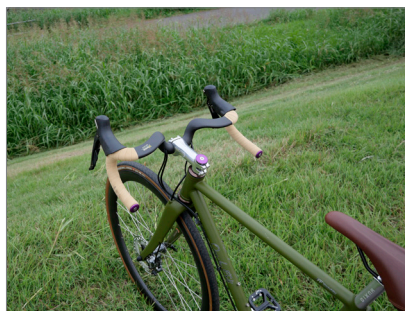
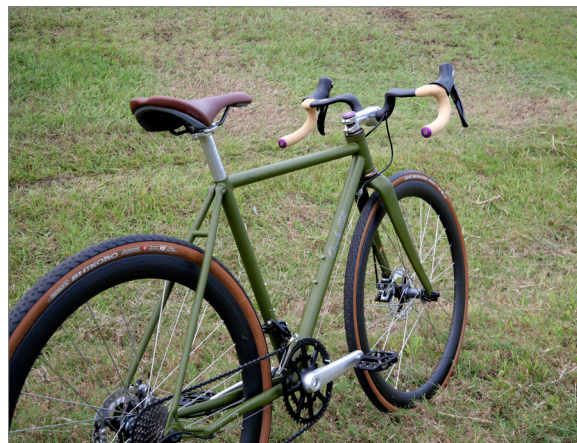
デッサンで各部の寸法を詳細に決めていきます



金属系の3Dプリンターを使用して形状を確認します



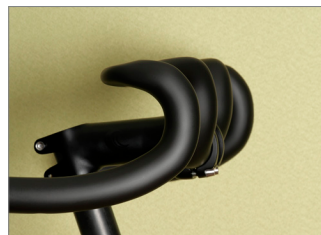
欧州の専門機関で内部を透視できる樹脂3Dを作成しケーブルの内部ルートを確認します



羽ばたくような造形に見えますがゆっくり走行でも安定の操作感をもたらします



長めのステムを装着して角度次第では、スーパーアップライトなポジションも得られます



ステムクランプを軸としたリーチとドロップを0=ゼロに近づけると有機的の形状になりました



ハンドル間のスペースを利用してステム上にスマートフォンなどがスッポリ収まります



境界は線を引くから逆にややこしいことに繋がることも多くなるのかと思います。心の境目は保つものの、ボーダレスに脱境界…と行きたいところ。このハンドル、発売は2023年の春過ぎ頃を予定しています。その頃、境界線はどうなっているのでしょうか。